

携帯電話が通づる北丹沢山域・陣馬山域へ

相模原市緑区 高部区長へ依頼

山の遭難事故で通報の90%以上が携帯電話からだと言われています。残念なことに蛭ヶ岳より北部地域の旧津久井町側では携帯電話の交信が出来ません。(蛭ヶ岳より主脈路焼山まで)昨年相模原市緑区の高部区長へ電話が通づるようにドコモへ要請を依頼しました。早速今年1月17日に区長より協力のお話をいただきました。

地蔵新道入山者が登山道より神の川広河原に転落、重傷にて救出(事故報告書)

平成23年1月6日

北丹沢山岳救助隊

本部長 杉本憲昭 隊長 外山雄幸

平成23年1月5日午前津久井警察署より、神の川園地のトイレ前に車を駐車し山に入った秦野市の72歳の男性の遭難届けが提出され、家族と相談し北丹沢遭難救助隊に出動依頼がありました。

遭難者は北丹沢風巻の頭～姫次～地蔵新道のコース計画し、登山道より神の川広河原に転落したものです。

1月5日現地、神の川ヒュッテには外山隊長が偶然いあわせ、その後加藤博恵氏が合流し、津久井警察署、津久井消防署の窓口として地蔵尾根は唯一、外山氏がエキスパートのため情報を提供しました。

その後、14時30分に広河原の手前にあるヒワタ橋の下にて発見され、無事救出されました。

詳細は不明ですが、断片的な話では登山道を間違え、2回程登山道より転落したとのことです。

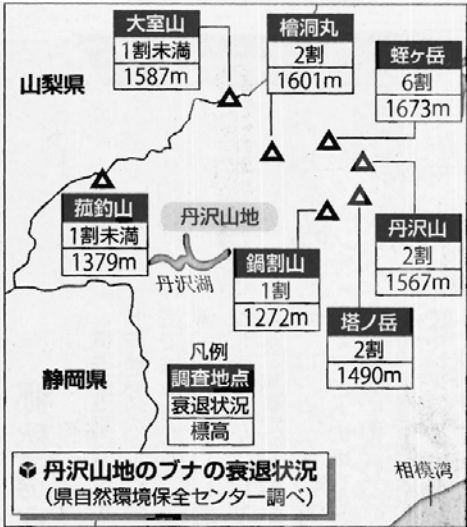
何はともあれ無事救出し、隊員一同、胸をなでおろしました。

今回の遭難救出にあたり、北丹沢山岳救助隊の隊員の皆様に連絡したところ、快く出動に協力戴き感謝にたえません。

ここに、心よりお礼のご挨拶を申し上げます。

出動に協力戴いた方(順不同)

- ①外山雄幸 ②内藤紀雄(愛川山岳会関係者6名)
- ③太田頭成 ④加藤博恵 ⑤小池栄一郎 ⑥井上佳那
- ⑦野崎光宏 ⑧木村正和 ⑨和泉悟 ⑩池崎友行
- ⑪網野博史 ⑫市川博文(キーパーとして)
- ⑬岸百合子(キーパーとして) ⑭杉本憲昭



ブナ衰退 高い標高ほど被害大

最高峰・蛭ヶ岳では6割

県北西部の丹沢山地で、最高峰・蛭ヶ岳(1673m)の山頂付近のブナが、他の山頂付近に比べて最も衰退が進んでいることが、県自然環境保全センター(厚木市)の調査でわかった。ブナの衰退はシカや害虫の被害や大気汚染の影響

も指摘されるが、同センターは、高い地点ほど大気汚染物質の光化学オキシダントがブナの衰退に影響していると考えている。同センターは2008年10月に衰退が顕著な孤釣山、鍋割山の山頂付近を調査し、ブナ計約300本の

衰退度を調べた。葉の量や色を総合評価し、枝葉が生い茂り、濃い緑は「5」、枝葉の一部が欠けると「4」、欠損が目立ると「3」、多くが欠けると「2」、枝葉がないと「1」、枯死は「0」に分類した。その結果、衰退度が中程

度以上(3~5)の本数の割合で示される衰退状況は、蛭ヶ岳で6割、最も高かった。楡洞丸や丹沢山、塔ノ岳ではいずれも2割以下、鍋割山では1割、孤釣山、大室山は1割未満だった。ブナの衰退が目立ち始めたのは1970~80年代。同センターによると、光化学オキシダントによる汚染された大気が滞留する相模湾沖からの風の影響などによる。丹沢山地では夜間、鍋割山の山頂付近は特定のブナが徐々に弱って枯死する単木型が目立った。集団型は大気汚染の影響が衰退の主因と考えられるが、単木型は大気汚染に加え、若葉を食べるブナハバチが原因と同センターは分析している。同センターの山根正伸・研究連携課長は「大気汚染物質は近畿・東海地方や中国大陸からも来ており、越境汚染対策が必要。また、ブナハバチ被害を食い止める対策を講ずることで、ブナの枯死を防げるケースもある」と指摘している。

身元を探しています

平成23年1月10日(月)、丹沢山系榛ノ木丸付近において身元不明の白骨死体が発見されました。心当たりのある方は津久井警察署まで連絡をお願いします。

身元不明者の所持品



津久井警察署 TEL 042-780-0110



丹沢山山頂から塔ノ岳方面に約300m歩くと、数年前に立ち枯れた樹齢100年以上のブナが無残な姿をさらしていた

2010 丹沢報告

両手を上げて降参する幽霊。10月上旬、丹沢山山頂から西斜面で幾本ものブナが枯死する姿を見て、そんな印象を持った。霧が斜面を駆け上がる心地よい秋の風と、朽ち果てた木々の不気味な姿とが、奇妙な対照を生み出していた。

ブナ立ち枯れ消える森



丹沢山地の尾根筋で進むブナの立ち枯れは、いくつもの要因が組み合わさった結果と考えられている。地表を覆うササなどをシカが食べ尽くす。むき出しの地表は乾き、雨水が土をえぐる。湿った場所を好むブナは弱り、土中の養分を吸収しにくくなる。害虫の「ブナハバチ」がブナの若葉を食べる。さらに、大きな影響があると考えられているのが大気汚染だ。「そのまよと吹く、この風」に含まれた光化学オキシダント(オゾン)がブナを衰退させます」と県自然環境保全センター(厚木市)の研究連携課長・山根正伸さん(52)が解説してくれた。南側の斜面から尾根、そして北側の斜面へと目を移すと、木々の葉や枝

大気汚染や害虫被害 30年で20%以上草地に

は徐々に多くなる。海側から風が木を弱らせているのだという説明がすんなりと頭にいった。丹沢山地約4万坪のうち、標高の比較的高い場所にはブナなどの広葉樹の森は約8000坪。山根さんらが1974、77年と2007年に空撮された山塊の写真を比較して推計したところ、20%以上の森が草地へと変わっている。今から20年ほど前、野鳥調査で楡洞丸山頂を訪れた山口喜盛さん(51)はすでに、こうした変化に衝撃を受けた。かつてブナの枝葉が陽光を遮っていた南側の斜面は、ブナが朽ち果て、明るく開けていた。ブナをすみかとするキツツキの仲間オオアカゲラは姿を減らし、丹沢では絶滅寸前とみられている。コマドリは、すみかの低草木をシカに奪われた。山口さんは「草地を好むビズイは数を増やすだろう。ブナ枯れを止めないと、生態系はすっかり変わってしまう」と危機感をあらわにする。山根さんも「ブナ林は豊かな森林の象徴。草地になると生態系が崩れ、首都圏の水源地ともなっている丹沢の恵みを享受できなくなる恐れがある」と表情を硬くした。(住友堅一)

18日、地球の生態系保全を話し合った名古屋市中で生物多様性条約第10回締約国会議が始まったのを機に、多くの恵みをもたらしてくれる丹沢山地の今を見つめた。

丹沢山地 相模原、秦野市、松田、山北町などにまたがる計4万坪余りの山塊で、神奈川県約6分の1の面積を占める。古くは大山や塔ノ岳が信仰の山とされた。1955年の国体で登山競技の会場に選ばれたのを機に登山道などの整備が進んだ。首都圏から近いこともあり、その後、登山者が急増した。ブナなどの広葉樹が広く分布し、数多くの動植物が生息する。1965年に丹沢大山国定公園に指定された。